



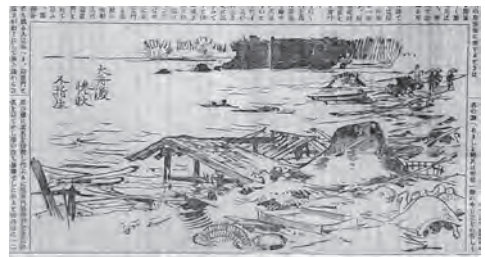
佐藤 潤

一般社団法人東北経済連合会 副会長

1000年後のいのちを守るために。
明治三陸地震に学ぶこと

明治から昭和期に活躍した書家、洋画家の「中村不折」のお孫さんが、わが宿に展示されている不折の書を見に訪ねられた。その折、同行されていた私の古き友人が、不折の生涯について遺した本を送ってくれた。紐解いてみると、夏目漱石の『吾輩は猫である』、島崎藤村の『若菜集』の挿絵や表紙の画家として知られ、正岡子規とも深い親交があり、子規は彼の描く「写生画」に大きな影響を受け、「柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺」のような、実景をありのままに写し取る「写生句」を生み出したと記されていた。

不折は「日本新聞社」の特派員として、明治29(1896)年に起きた「明治三陸地震」の被災地の様子を、克明な挿絵で遺していることがわかった。この地震は、三陸沿岸を中心に、死者約2万2千人、流出・全半壊家屋1万戸以上という被害を出した過去最大の津波災害であった。同じくこの時「日本新聞社」の記者であった正岡子規は、持病で重篤な状態にあったが、死期を悟った時、不折の挿絵を新聞に掲載し続けることで、この惨状を後世に伝え、命を守りぬくため目に見える「象(カタチ)」として遺したと云われている。



▲「震災学」(荒蝦夷)2015年6月号掲載

それから115年。東日本大震災で多くの犠牲者を出した女川町では、当時の女川第一中学校に被災後まもなく入学した卒業生たちが立ち上げた「女川1000年後のいのちを守る会」が、町内の浜21カ所に津波到達点を知らせる「女川のいのちの石碑」の建立を目指した活動をしている。千年後のいのちを守るため、その教訓を「形(カタチ)」として遺す、素晴らしい取り組みである。

千年以上前に起こった「貞観地震」、政宗公の時代に起きた「慶長三陸地震」、不折が描き遺した「明治三陸地震」…。幾度も大きな津波被害に見舞われている東北に暮らす私たちですら、その教訓はなかなか伝承されてこなかった。では、その教訓をこれから千年後に伝承していくには、どうしていけばいいのだろうか。

2千年以上続く宗教でも「教理」という教えの体系があり、長い歴史の中で行い守られている「型(カタチ)」がある。わが宿の主屋には、災害を忘れないようにと、高野山の奥之院から持ち帰った聖火が約450年もの間、一日も絶えずに燃え続けている。苦行ではあるがそれは何百年もの間「型」として毎日続けられている「行」だ。ある高名な仏教者の方はこれをご覧になり、『言の葉や記録の伝承はどんなに努力しても300年が限度。この聖火が長きに渡り継続している要因は、人が行うという、苦しい「型」で続けさせてきた先人の申し渡しがあったからこそ。』と。21世紀、情報化が進み記録を残すことは昔よりはるかに容易になったが、データ化されても500年後にはただの保存となる懼れもある。

女川の若者たちが取り組んでいるように、目に見える「形」で遺すこと。また約450年もの間その火を守ってきたように「型」で残すこと。例えば、後世に伝えるため苦しいことを承知の上で、地域の首長(代行者を決めて)が日々「型」として何かをし続ける、体を使って伝承していくことが、原始的ではあるが、震災の教訓を風化させない一番確実な方法なのではないのだろうか。

(株式会社ホテル佐勘 代表取締役会長・さとう じゅん)